

# 博士論文要旨

## 世紀転換期の出版文化と押川春浪 ——冒険小説の生成と受容——

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程

タケダ ユキ  
武田 悠希

本稿の主旨は、押川春浪の創作活動の広がりや推移を世紀転換期の出版文化のなかで捉えることによって、新たに形成された読者と押川春浪の創作活動との関係性を考察することにある。押川春浪が出版産業のなかの娯楽や「面白さ」として読者に何を提供してきたのか、そして、その創作活動が読者にとってどのように機能し、読み取られたのかを分析し、押川春浪の創作活動が示し得た想像力の可能性を明らかにしたい。

そのために、本稿では、世紀転換期の国内外の社会的状況に連動する出版文化の動向のなかで、押川春浪の創作活動が読者に何を提供してきたのかを次の三つの観点から分析する。

まずは、第一部で『海島冒険譚海底軍艦』を刊行して商業作家となってから、博文館に入社し雑誌編集者として活躍していくまでの押川春浪の創作活動の経緯を、当時の出版文化の動向と照らし合わせながら辿ることで、その創作活動の広がりや経緯を把握する。第一章では、『海島冒険譚海底軍艦』が、新たな読者層が開拓される出版産業の動向のなかで、家庭向けの冒険小説として企図されたことを、主要登場人物の一人である日出雄少年の描き方に注目して分析する。第二章では、押川春浪が冒険小説作家として当時の読者に認知されていく過程を、「少年世界」での露出から分析する。第三章では、日露戦争の開始に伴って創刊された戦時報道画報雑誌「日露戦争写真画報」の編集スタッフとして博文館に入社した押川春浪の、家庭向け雑誌編集の実践を呈示する。以上を通して、同時代の出版文化の動向のなかで、押川春浪の創作活動と読者との関わりの様相と推移を明らかにする。

そのうえで、第二部では、海外情報の反映という点に注目して作品分析を行うことで、押川春浪の創作活動に見られる、日清・日露間の両戦争の戦間期に国内で昂揚したナショナリズムの発露、日本の海外進出と植民地政策への同一化という枠組みにはおさまりきらない部分を提示する。第五章では、『英雄小説武侠の日本』に描かれたボーア戦争とフィリピン独立戦争に関する言説を分析し、第六章では、アレクサンドル・デュマの「モンテ・クリスト伯」に描かれた異国情緒を、押川春浪が『伝説小説銀山王』において世紀転換期の植民地主義として書き換えたことを分析する。二作品の分析を通して、押川春浪が、世紀転換期の出版文化を通じてもたらされた膨大な国際情報、海外情報を利用しながら、世紀転換期の帝国主義と植民

地主義を物語化し、そうした世界の構造を「面白さ」として読者に呈示したことを明らかにする。

最後に、第三部では、「冒険世界」の主筆に就任し、「冒険小説家」として認知されるに至るまでの背景に、どのような読者の要請や需要との関わりがあったのかを、学生を主人公に描いた作品から分析する。第七章では、『海島冒険奇譚海底軍艦』刊行以前に押川春浪が素人作家として雑誌「海国少年」に連載していた内容を元にして、『海島探険塔中の怪』をとりあげて、読者に提供する娯楽性が探偵小説の型と海を越える冒険を組み合わせることで構成されていることを呈示し、その中で海を越える「冒険」が、国家に囲われていく学生の身体感覚を拾い上げながら、国民としての自己同定の強化と、国民として編成される身体からの解放という二重の意味に機能した可能性を論じる。第八章では、学生の実生活や学校生活での情緒の揺れ動きと「旅」や「冒険」への憧れを描いた『立身膝栗毛』が、学校教育に組み込まれていく近代化された身体の変容感を小説化した作品であることを分析する。以上、二つの作品分析を通じて、押川春浪が新しく形成され開拓された読者層に提供した「冒険」が、近代化された自己の身体への懐疑を喚起する想像力として機能した可能性を呈示する。

以上を通じて、押川春浪の創作活動と読者層の形成との関わりを把握するとともに、押川春浪の冒険小説が、国家制度による国民化の過程で見出されてきたことを示し、同時に世紀転換期の世界構造の矛盾に目を向け、国民化される身体への懐疑を喚起する重層的な想像力を読者に呈示したことを明らかにする。

読者と出版産業との関わりの一側面として、出版文化のなかで娯楽、「面白さ」という想像力が、どのように生み出され、見出されてきたのかを捉えてみたい。